



笑顔で結ぶ。人を、日本を。



キリン SCJ「絆」奨学金 2012 年度活動報告書
2012 年 4 月 1 日～2013 年 3 月 31 日

キリン SCJ「絆」奨学金事務局
2013 年 5 月

1. 事業の概要

事業名	キリン SCJ「絆」奨学金											
事業期間	全体の対象期間 : 2011年10月1日～2014年3月31日 本報告の対象期間 : 2012年4月1日～2013年3月31日											
事業主体	被災地の将来の発展を支える子どもたちの学びの機会を大切にしたいと願うキリングループと、世界中で子どもの権利が実現される社会を目指すセーブ・ザ・チルドレン・ジャパンが、協働で実施。											
目的・概要	<ul style="list-style-type: none"> 東日本大震災（以下、震災）の影響で学業継続に支障をきたしている高校生が学業に継続的にアクセスできるように支援する。 震災により甚大な打撃を受けた東北地方における農業の次世代育成を目的の一つとして、奨学金を通じて将来的に農業の担い手となる高校生を支援する。 上記の目的を達成するため、岩手、宮城、福島 の 3 県において、県立農業高校または県立高校農業科に在籍し、且つ震災により経済的支援を必要としている生徒のうち、将来的に農業に従事する意思がある生徒に対し、教育諸経費として月額 3 万円を支給する。 											
対象エリア 及び 対象校	岩手県、宮城県、福島県の 22 校 <table border="1" data-bbox="477 1137 1315 1254"> <thead> <tr> <th>岩手県</th> <th>宮城県</th> <th>福島県</th> <th>合計</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>4 校</td> <td>7 校</td> <td>11 校</td> <td>22 校</td> </tr> </tbody> </table>				岩手県	宮城県	福島県	合計	4 校	7 校	11 校	22 校
岩手県	宮城県	福島県	合計									
4 校	7 校	11 校	22 校									
支給 対象者数	合計：662人* ¹											
2012年度 の実施背景	<p>2011年3月11日に発生した東日本大震災から2年余りが経過した。2年半を実施期間に定め2011年10月に開始した本プログラムは、2013年度で最終年度を迎える。開始から2012年度3月までに延べ1268名の農業を学ぶ高校生が本奨学金を受給した。2013年度も引き続き支援が必要な高校生達が安心して学校生活を送れるよう経済的な側面から支援を継続していく。</p> <p>まず、被災地の農業高校の復興状況について述べると、校舎に津波や地震による直接的被害を受けた学校は、他施設の間借りや一部プレハブで授業を運営するなど依然厳しい学習環境が続いている。校舎の損壊による悪影響は言うまでもないが、授業の半分程度が実習で占められる農業高校にとって、実習設備への被害は授業運営において大きな影響をもたらした。また、原発事故の影響が大きい福島県では、現在も全校避難を強いられている学校があるほか、農作物の種類によ</p>											

*1 2012年10月末時点

	<p>っては栽培が制限されていることから、実習もカリキュラムを変更したり規模を縮小したりしながら限られた範囲で行われている場合が多い。加えて、放射能被害にともない水耕栽培や放射能測定器など新たな設備の必要性も生じている。同県は震災前から農業就業人口が全国的にも高く、農業高校は担い手の育成に大きな役割を果たしていた。震災前の学習環境を回復し、今後の局面に対応していける担い手の育成のためにも農業高校への支援は不可欠であると考えられる。</p> <p>次に農業学校の生徒個人の状況については、震災の影響を受けて収入が減少したり二重生活にかかる経費や家屋の修繕費、二重ローンの支払いなどに家計を圧迫されたりしている保護者が多く、教育費用の捻出が難しい現状がある。専門高校では就職に役立つ資格の取得が推奨されているが、これらは一般受験者と同様に検定料がかかるほか、検定対策の教材購入も自己負担である。また、入学時は実習用の作業服一式の購入に加え部活動に必要なユニフォームや道具を揃える必要があることから教育費用の支出が集中する。</p> <p>2010年度より全国で高校無償化が実施されているものの、震災の影響で依然家計が圧迫されている被災地では、学業継続のためには元より、資格取得や人間形成に大きく資する部活動などの課外活動に通常通り参加できる環境をサポートする必要があることから、経済的な支援の意義は依然大きい。特に専門高校は高校課程修了後に就職することを想定して入学する生徒の割合が高い。つまり普通科と比較すると家計状況から早期の就職が可能になる専門高校への入学を選択した生徒も相対的に多く含まれる。別項で述べるように、奨学金を受給しなかった場合、ほとんどの受給生がアルバイトで対応するつもりだったと回答した。経済的な心配をせずに課外活動に参加できる機会の維持に本プログラムが貢献したことは一つの実績であるものの、被災地の高校生がこうした機会を奪われる可能性に現在もさらされていることは憂慮すべき状況と言える。</p> <p>また、保護者が健在である被災地の高校生を対象とする奨学金は貸与型が主流であるため、経済的に苦しい状況において更に将来の返済を想定して受給することに躊躇するケースも多い。</p> <p>以上のように、保護者の経済状況の悪化から高校生達が進路選択の幅を狭めていたり、通常の学校生活を送ることが難しくなったりしている状況が見られることから、本プログラムはこうした状況を踏まえ2012年度は農業系高校に通う生徒達の各家庭の経済状況に審査の重きを置き、662名への支給を実施した。なお、本プログラムの昨年の実績については、「キリン SCJ「絆」奨学金 2011年度活動報告書」を参照されたい。</p>
<p>カウンター パート</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・岩手県、宮城県、福島県の各県教育委員会及び教育庁の高等教育課 ・上記3県の各対象校

2. 2012 年度活動の実績ならびに成果

(1) 対象校の拡大

新たにニーズが確認された岩手県及び福島県の農業系高校 10 校を 2012 年度より対象として拡大したことで、広範なエリアの被災高校生へ奨学金を支給することができた。また、震災からの時間の経過に伴い、震災当時の被災程度よりも、被災を受けて保護者の経済状況がどのように変化したかという点が高校生の学業継続に最も影響する段階にあることを鑑み、提出書類と審査基準を経済状況の困窮程度に重点を置くように改定した。こうした措置を通じ、奨学金支援の必要性がより高い対象者をカバーすることができた。

(2) 受給者の内訳

岩手、宮城、福島 3 県における 20 校*²の農業系高校に在籍する生徒 662 名に奨学金が支給された。

表 1：受給者数内訳

【学校・地域別】

No.	県	学校所在地	学校別合計	県別合計	受給生合計
1	岩手	久慈市	4	12	662
2		大船渡市	4		
3		遠野市	2		
4		滝沢村	2		
5	宮城	石巻市	34	261	
6		名取市	98		
7		大河原町	19		
8		美里町* ³	21		
9		美里町	8		
10		巨理町	40		
11		気仙沼市	41		
12	福島	南相馬市	155	389	
13		サテライト形式（いわき市）	117		
14		いわき市	62		
15		福島市	21		
16		鏡石町	9		
17		白河市	3		
18		棚倉町	1		
19		喜多方市	10		
20		会津坂下町	11		

*² 対象校 22 校のうち、2 校は受給資格に該当する者がいなかったため 20 校の生徒に支給。

*³ 対象校 22 校のうち、2 校が同じ美里町内に立地している。

【学年別・男女別】

	1年生	2年生	3年生	合計
うち男子	93	125	142	360
うち女子	79	110	113	302
合計	172	235	255	662

2012年度は、上記の通り662名の高校生へ奨学金を支給した。昨年度と同様、特に原発事故の影響で農業への打撃が大きい福島県における支給が半分以上の割合を占める。

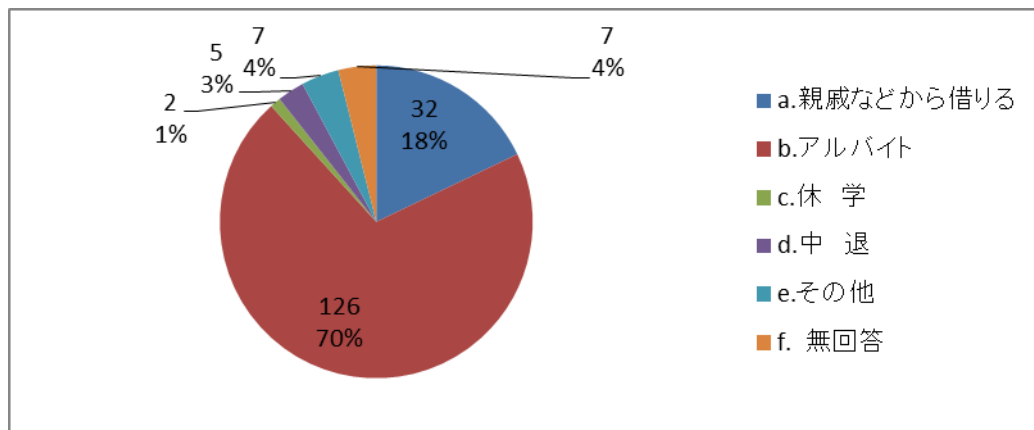
(3) 奨学金支給による就学支援の成果

奨学金を支給することにより、受給生の高校生活の継続と充実に寄与した。

- ① 奨学金が支給されたことにより、受給生はアルバイトに多大な時間や労力を割くことなく、学業や部活動に重きを置く通常の学校生活を送ることができた。

グラフ1：奨学金を受給していなかった場合の受給生の対応（受給生へのアンケート*4より）

回答者数：174名（うち5名重複回答）



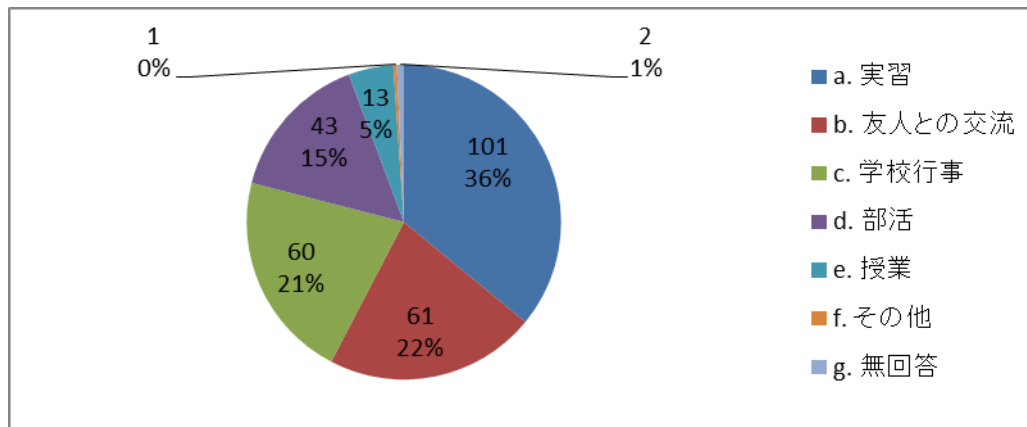
2012年度の受給卒業生に「奨学金を受給しなかった場合の対応」を尋ねたところ、グラフ1のようにアルバイトで対応したという回答が70%を占めた。このことから、奨学金が学業や実習に集中できる環境を提供していたことが読み取れる。また、同様の質問項目へ4%が「休学」、「退学」を選択していることから、震災を原因とした学業の中断を回避する機会として成果を上げたことが分かる。

*4 2013年3月、受給対象者のうち卒業生258名を対象に実施。

②農業を学ぶ生徒にとって学校生活で最も印象に残った実習活動を支援することができた。

グラフ 2：受給生の高校生活で最も印象に残ったこと（受給生へのアンケートより）

回答者数:174 名（複数回答）



【具体的内容】（受給生へのアンケートより抜粋）

- ◇ 実習授業で大根を育て、たくあんを作りました。コメの生育の調査などをして農業を学んできました。（男子）
- ◇ 栽培実習。普段なんとなく食べていたものが、こんなに長時間をかけてできているのを知ることができた。（男子）
- ◇ 部活動。入学前から入りたかった弓道部に入ることができ、楽しい3年間の部活動をすることができました。（女子）
- ◇ 販売実習での一般の人とのふれあいが楽しかった。（男子）
- ◇ 実習での販売や、野菜の種類や色々学んで覚えられたので、将来いかせるように頑張りたいです。（女子）
- ◇ 修学旅行では、愛媛県の方々やいろいろな方々に支援していただき、楽しい修学旅行にすることができたので感謝しています。（女子）
- ◇ 全校田植えをしてクラスの団結力が深まったので良かったです。（女子）
- ◇ 部活でチームプレイの大切さを学びました。（男子）
- ◇ 販売実習。放射能の心配もある中、私たちがつくった加工品や作物を買ってくださるのがとても嬉しかったです。（女子）

高校授業料の実質無償化が実施されたことにより、本プログラムで支給される月額3万円の多くは実習作業服一式やそれに関連する資格取得の教材及び検定料、また部活動や修学旅行費用のサポートに充当されている。アンケート結果から分かるように、卒業生の高校生活で最も印象に残る実習をサポートしたことにより、受給生の高校生活の充実に加え実習から得られる知識や技術の習得に寄与した。

③受給生から数多くの農業に対する積極的な思いが寄せられた。

【具体的内容】(受給生へのアンケートより抜粋)

- ◇ もっと、自分達で行動し、より良い農業にすることが必要です。(女子)
- ◇ 父がけっこう農業で凄いので、父を超す。(男子)
- ◇ 津波でだめになってしまった畑などをもう一回作りなおしていきたい。(男子)
- ◇ 農業高校で学んできて、日本にとって農業がとても大事なものであると実感しました、東日本大震災でこの地区も農業が厳しい状況になりました。何年かかっても、また福島で田園の風景が見られる日が来ると良いなと思います。(女子)
- ◇ 地震で大変な思いをした人はいっぱいいるし、まだ立ち直れない人や心に傷を負った人も多いと思うので、今度は自分たちが役立つ番なので頑張りたいと思います。(女子)
- ◇ 育てたい作物などがあるので、高校3年間で学んだことを活かしていけたらいいです。(男子)
- ◇ 震災後、食の大切さを痛感しました。卒業後、農業とは離れた職に就きますが、あの時の思いを忘れないようにしたいと思います。(男子)
- ◇ 福島はやはり風評被害が一番の敵だと思います。時間はかかりますが、風評被害のない福島にしていけたら、と思っています。(女子)
- ◇ 家の畑をいつまでもそのままの形で残したいです。(女子)
- ◇ みんなが笑顔になれる日が早くきてほしいです。私は一生懸命働いて地域の支えになりたいです。(不明)
- ◇ 祖母の家が農家だったので、野菜や米はいつも祖父母のつくってくれた新鮮でおいしい作物を食べていましたが、原発の影響で農業が出来なくなりました。やはり苦労は大きくて、一刻も早く安全に農業ができて、県内はもちろん、県外の方にも福島の作物を食べていただけるようになると良いなと思っています。(女子)
- ◇ 自然を向き合う農業の気持ちよさをもっと多くの人に感じて欲しいと私は思います。(男子)

(4) 卒業後の進路

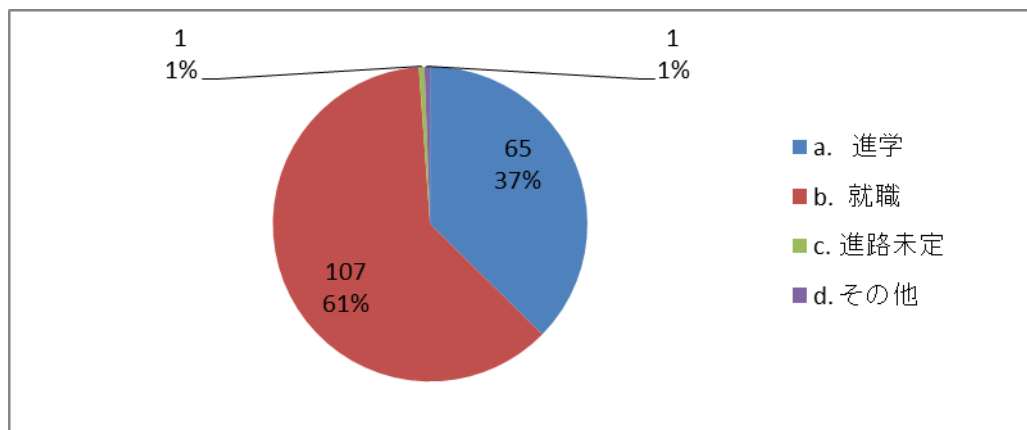
2012年度に奨学金を支給した3年生258名のうち、256名が学業を中断することなく対象校を無事卒業した。学年途中の退学・転校は各1名*⁵であった。

*⁵ 退学理由は、経済的困難に起因するものではないことが確認されている。

①卒業後の進路は、アンケート回答者である 174 名中、進学*⁶が 65 名（37%）、就職が 107 名（61%）、その他進路未定が 2 名（2%）であった。（受給生へのアンケートより）

グラフ 3：受給生の卒業後の進路（受給生へのアンケートより）

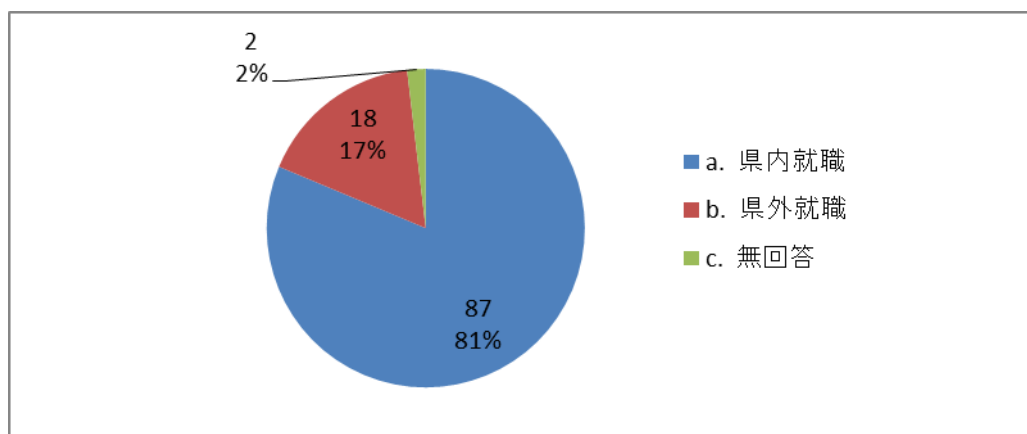
回答者数:174 名



②就職した 107 名の生徒のうち、県内就職が 87 名（81%）、県外就職が 18 名（17%）、不明が 2 名（2%）であった。（受給生へのアンケートより）

グラフ 3：受給生の就職先（受給生へのアンケートより）

回答者数:107 名



3. モニタリング活動

2012 年度のモニタリング活動の一環として、田植えや対外販売実習等の行事に合わせて学校訪問を行った。活動参観や行事への参加、また受給生や教員にインタビューを実施することで、農業高校の取組みに対する理解を深めるとともに、これらの様子をブログ等で掲載することにより、被災地における農業高校の活発な活動の様子を社会に発信した。また、インタビューを通じて、本奨学金プログラムが実習を始めとする受給生の充実した学校生活に活用され、

*⁶ 専修学校、短期大学、大学等を含む

卒業までの展望とその後の進路の選択肢の拡大に寄与していることを確認した。

【対象校の活動の様子】

田植え実習



実習成果物の販売



稲刈り実習



実習成果物販売



【卒業生へのインタビュー抜粋】*7

- 学校生活で一番印象に残っていることは何ですか？

文化祭が一番楽しかったです。今年度の文化祭は「作るもの」に焦点を当てたものが多く、農業クラブの校内活動では、復興活動の一つとして、花のモニュメントを作成しました。また、農業クラブ全国大会の農業鑑定競技に出場し、農業に関する知識や技能を競いました。例えば、水に刺さった枝を見て、樹木名を答える問題が出題されていました。何百人も参加者がいて、長野オリンピックの会場で行われたのですが、とても楽しかったです。福島からは3-4校が参加しました。

- 全国大会に参加してみたいかがでしたか？

他の学校の生徒と意見交換や交流ができて良かったです。各学校により、実習の内容が異なっていて、自分の学校ではできないこと、例えば重機を専門的に学ぶ学校があるなど、農業を学ぶ高校でもいろいろあることがわかりました。

- 進路についてはご両親に相談されたのですか？

(保護者) 自分で勝手に大きくなっていき、親としては口出しはしていません。進路も随分と揺れたようで、最初は就職すると言っていました。その後、専門学校になって、最後は農業大学に落ち着きました。

(本人) 昔から庭の木の枝切りが好きでしたし、校庭の木の上に登って遊んでいたの、自然と造園に関わる仕事をできればと思いました。始めは進学をせずに一日も早く地元の復興に携わりたかったのですが、高校生活で様々な体験をしながら色々と考えていくうちに、しっかり勉強をしてその後に復興に貢献しようと思うようになりました。

-先生から見てどのような生徒ですか？

(先生) 自然科学に関心があり、質問も積極的にして、明るい印象があります。発言力があり、知的好奇心もあります。震災直後は顔に疲れが見えましたが、今は目の力も強くなり、回復したように思えます。県大会の意見発表では「農業を通じて地元の復興に貢献したい」と言っていたのが印象的でした。

-将来の復興の具体案はありますか？

人々を津波の被害から守り、しかも自然と共存できて、人間の手があまりかからないような防潮林をつくりたいと思います。日本には防潮林が数多くありますが、その多くは廃れています。次世代の防潮林は人の手があまりかからないようなものにしたいと思います。南相馬には相馬野馬追などの伝統行事も伝わり、良いところも沢山あります。自然が多い田舎としての復興を進めたいと思います。

*7 2013年3月1日の卒業式に対象校にて実施。

4. 2013年度のプログラムについて

(1) 農業高校の情報発信を支援

本プログラムの最終年度である2013年度は、従来通り農業高校の生徒達が授業や実習、課外活動を通常通り行えるよう経済的側面から支援するとともに、他のプログラムとも連動させながら生徒達の学校生活の充実や知識・技術の向上を支援していく。このほか、一般にはあまり知られていない農業高校の多彩で専門性の高い活動を社会に発信していくとともに、日本の農業と地域の復興を真剣に考えている受給生達の声を届けていくことに注力していく。

また、本プログラム終了後を見据え、本年度の終わりに引き続き経済的支援を必要とする高校生のために、自治体や他団体が実施している奨学金情報を提供できるよう情報収集に努める。

以上